

景 / 観 / 文 / 化

NPO法人 景観デザイン支援機構 けいかん・きこう

<http://www.tda-j.or.jp>

2019-12-01

特集 屋上と都市景観

目次

P1

■巻頭

アクロス福岡のステップガーデン
「都心の山」／(写真・文) 田瀬 理夫

P2～3

■特集：屋上と都市景観

屋上緑化の今と未来 / 井上 洋司
スカイラインの中にいるということ
/ 宮城 俊作
移り変わる緑化の意義 / 鳥羽 達也

■ランドスケープ事情

屋上菜園ブームを次世代に！？その
ために考えるべきこと / 金子 祐介

P4～5

■TDA NEWS-1

第8回景観デザイン交流会：開催報告
/ 矢内 匠

■TDA NEWS-2

日韓都市デザイン交流会 2019：開催報告
/ 矢内 匠
韓日都市デザイン交流会の意義と今後の課題
/ 李 錫賢
日韓都市デザイン交流会 in 松本
/ 山田 健一郎

P6

■シリーズ：地域から

「岐阜市」その2 / 末永 三樹

■景観ビジネス最前線

/ ナカ工業(株)

■ホワイトボード



アクロス福岡のステップガーデン「都心の山」

旧県庁跡地に建つこの建物は目の前の天神中央公園から見上げれば「山」に見える。この山は公園の連続として日中開放されていて、最上階からは博多湾や遠くの山並が一望できる。国際会議場やパスポートセンター、シンフォニーホールなどと民間のオフィスが入る都心の複合施設であり、計画当初その屋上の緑は四季を感じるごく自然な樹林がふさわしいと感じ、テーマを「花鳥風月の山」とし2階から13階までの建築南面表層を点描画風に多種類の郷土種の苗木を混植した。そのことから分かるように、時間をかけてコンクリートの建物を福岡らしい「山」に育成していくという植栽であったにも拘わらず、竣工当初はコンクリートのピラミッドなどと酷評された。

竣工5年目に行った温熱環境の調査で、真夏の無風の夜に下降気流（おろし）が観測された。建物周囲の地上の昼の気温は植栽のある南側がガラスに被われた東、西、北側より低いこともわかった。今では2階～13階のルーフに布設された厚さ50～60cmの人工軽量土壌（アクアソイル）の植栽基盤は雨水をたっぷり貯留し、郷土種の苗木が雨水だけで（無灌水）育ち、都市の気象に影響するほどの林となり、年々存在感を増して福岡のシンボリックな都市景観として認知されつつある。また、当初の植物は76種類だったが、育成管理の中で福岡市を囲む山々の植生を構成する多種類の植物を少しずつ補植し、景観的にも生態的にも多様性を年々ストックしている。山から野鳥がかよい、彼らが運んだ植物も大きく育っている。落葉も剪定枝も一切外に出さず各階の林床に堆積し、施肥もしない、農薬や殺虫剤は使用しない。この山は健康に育っていて、余剰の雨水は植栽基盤でろ過されて脇を流れる薬院新川に流入する水源涵養林となっている。間もなく25周年だが、その間ヒートアイランドを緩和する建築が思うほど続かなかったのは寂しい限りだ。

(株)プランタゴ：代表 田瀬 理夫



井上 洋司

ランドスケープアーキテクト
背景計画研究所代表/TDA 正会員

2001年の『東京における自然の保護と回復に関する条例』ができて、そろそろ20年になる。そのようななか、設計者として感じている危惧や将来像を予測してみた。

1：耐用年数と屋上緑化

おそらく多くの設計者が悩むのは防水と屋上緑化との関係である。私の処では、建築の企画から加わる時は、躯体そのものが防水機能を持つコンクリート打設技術*を導入してもらえるように話す。これにより防水工事の耐用年数等を気にする事なく植栽でき、コンクリートの中性化を招く空気に直接触れる事を土壌が避けてくれる。当然、根を直接コンクリートに触れないような工夫は必要であるが、長く時間をかけ出来上がる庭園と、防水の機能の足並みを揃えることができる。この例が写真の屋上庭園である。これは外廊下の庭園化で、霧の発生装置で、人に撒水がかかる事を防ぎつつ苔むす情景をつくりだしている。

2：都市のエコロジカルな役割

設計のあとの管理を指導する管理監修業務を何箇所かで行っている。

ある屋上で、面白い事に気づかされた。定期的に見ていると屋上の植生が少しずつ変化していく事だ。竣工間もない時は、当然ながら植栽計画の通りの植栽が生育しているが、しばらくするとその植栽の優勢種

とそうでないものが、徐々に現れ始める。10年もするとその優劣は顕著になり、さらに風等が運ぶ地域の種子による植生が生育し始める。つまり屋上とはその地域の周辺の典型的な地域植生種の場になる可能性をもち、さらに小鳥は周辺からここに飛来し、周辺樹木の種子を自然に運ぶ。

つまり建築物を、都市の地面の起伏の一種類ととらえるならば、屋上は都市の地面の起伏の一部と考えられる。言い換えると庭園設計という地瘤（ジコブ）と考えて良い訳だ。そこは、様々なその場所を象徴する植物・昆虫等が生育できる新たな緑のネットワークの要となる可能性を秘めている。屋上緑化は人が楽しむスペースという考え方から、地域全体の自然のインフラを整える機能を持つ場所となるのではないかと考えている。

ここに未来の屋上の緑化のあり方の光がみえる。都市の大緑地の空間と空間を結ぶエコロジーのネックレスの役割を屋上緑化が担う。それを意識した行政指導や屋上施設のあり方を論じる必要があるのではないかと考えている。



大半の土壌厚を20cmとし、高木の位置のみ土壌厚をとるように調整している。(タケイ式コンクリート打設)



宮城 俊作

東京大学大学院教授/設計組織 PLACEMEDIA・パートナー

いただいたテーマは屋上緑化や屋上庭園の景観的な意味やデザインに関する事だったのですが、ここでは少し異なる観点から考えてみます。言うまでもなく、屋上緑化と屋上庭園は全く別物です。屋上庭園は、屋上緑化と同様に都市景観の形成に多様な可能性をもたらすものではあるのですが、それ以上にその中に人が入りこむことができる空間であるという点で、根本的な違いがあります。もちろんそこには、新しい都市のパブリックスペースが創出される機会が見出されますが、その場所がパブリックであるかプライベートであるかということは、この際あまりこだわることないでしょう。そんなことより、もっと本質的なこと、つまり人が都市の景観を知覚する視点を新たに獲得しているということに着目してみます。都市の中で少し高いところに上った時に見えてくる街並みが、地上のレベルから見た時とは全く違うものに感じられる事はよくあることです。

1枚目の写真は、先日仕事で滞在了したパリのマレ地区にあるホテルの最上階のバルコニーから見たもの。パリに限らず、欧州の歴史的な市街地では建物の高さに関する規制がかなり厳格なので、それほど高くない位置からでも街並みと空とのあいだの輪郭、スカイラインが整っていることが意識

ランドスケープ事情

屋上菜園ブームを次世代に！?そのために考えるべきこと



新宿駅に隣接する商業ビルの屋上菜園



銀座の商業ビルの屋上菜園に隣接した屋上緑化の事例

●菜園事業の変遷

2010年を前後して「食の安全性」や「オーガニック」といった観点で家庭菜園ブームが起こった。時を同じくして、都内の商業ビルの屋上では貸し菜園事業が開始される。開園から10年近くが経とうとしている現在、その勢いは止まらず菜園事業を取り扱うメディアの誌面を賑わせている。

プロの指導の下で菜園について学ぶスタイルが人気を博している理由かもしれない。しかも都心部（銀座、新宿、恵比寿など）の駅近にある商業ビルの屋上を利用し、事業者が菜園を管理してもらいながら手軽に農業ができるということが、若い世代にも人気となっているところだろうか。つまるところ、菜園の本来持つ泥臭いイメージを一掃していることがうけている理由だろう。結果として、こうした状況に目をつけた多くの企業が屋上菜園事業に新規参入してきている。

●屋上＝ゲーテッドな景観

上記のことからもわかるように、近年流行している屋上菜園事業は、1970年代初頭から日本でも取り入れられるようになった余暇の「健康的な生活を送るための生活インフラ」の一部として整備されていったクライנגルテン（近郊型市民農園）とは思想的な面で一線を画している（クライングルテンも、近年では都市部近郊の観光的な役割を担っているため商

されます。アティック（屋根裏部屋）やペントハウスに続く小さなバルコニーに出てみれば、そこがスカイラインの一部であること、その中に自分が身おいていることが実感されます。



2枚目の写真は、私たちがデザインを手がけた旧東京中央郵便局（JPタワー / KITTE）のルーフガーデンとそこから見える東京駅です。数年前に復元された駅舎の全貌が手に取るようにみえてきて、その屋根の特徴的な輪郭と駅前広場を取り囲む高層建築の輪郭が対照的なものであることがはっきりわかります。屋上庭園にかぎらず、現代都市の中に次々と生まれつつある少し高い位置の新しい視点は、景観を知覚する主体がスカイラインの中に居場所を獲得していることを実感させ、遠景で語られることの多かった都市のスカイラインに、少しばかり異なる意味を付加してくれます。



特集
3
移り変わる緑化の意義
変容する建築と緑と人との関係
羽鳥 達也
㈱日建設
設計部門 ディレクター

日建設の過去の仕事には、パレスサイドビル（1966）、別子銅山記念館（1975）など大規模な屋上緑化を施した建物が存在する。この時代の屋上庭園や屋上緑化は、現在のような環境的な課題を解決するための条例に基づくものでもなく、事業主の意識の高さによって実現したものと思われる。

実際に、竣工当時のパレスサイドビルの屋上庭園からは戦争によって破壊された建物がまだ幾つか見えたそうだ。社会に資する環境を作ることに對して、高い意識が事業主にも働いていたことが想像できる。

この頃から数十年の時を経て、地球温暖化やヒートアイランド現象により都市の亜熱帯化が進み、条例による緑化基準の割合も年を追うごとに大きくなっている。

大崎駅前のシンクパークでは、当時の緑化基準を大幅に上回る緑地を設け、さらに綿密な環境測定を緑地造成前後で行い、緑地の風上の気温と風下の気温を比べ2程度低下することを確認している。

これを参考に、私が設計を担当したソニーシティ大崎では、多孔質セラミックルーバー内に貯留雨水を循環させ、ルーバー表面の気化冷却効果と西側の緑地によって、さらにヒートアイランド化を抑制する試みを実現した。

その後を担当した、震災以後の計画であるコープ共済プラザでは、この冷却外装を壁面緑化の技術に応用することによってより簡易に実現し、前面道路の歩行域の気温を低下させつつ、街路樹のように四季の変化をもたらしている。このように建築計画における緑地、緑化は都市の微気候を改善する決め手として考えられるようになってきている。

一方で、建築の緑化は、単に地面を緑化すること以上に歓迎されると実感している。特にコープ共済プラザでは、荒れがちな近隣説明会ですら好意的なコメントが多くあった。また近くに住む中学生が、建物の緑を自由研究の題材にするために、直談判にオフィスを訪れたり、周辺住民との関係を取り持つきっかけになっている。加えて、現在計画中の商業施設でも豊かな緑はもはや必須といえる。それは潜在的に人工物としての建築そのものの変容が期待されているからと筆者は考えている。

こうした歓迎や期待がなぜ発生するのか。都市に住む人々には、自然に暮らす人々や、農業など一次産業に携わる人々に対して、負い目や引け目があるからではないだろうか。しかし、自然での暮らしに回歸することは現代の多くの都市生活者には不可能だろう。そこで、より自然に近くなったと実感できる建築や都市環境が、求められているのではないかと。

今後、建築のグリーンングは心理的効果や集客効果も期待されて、よりフィクショナルな形に変容していくことは間違いない。

城西国際大学助教 / TDA 正会員 金子 祐介



恵比寿駅に隣接する商業ビルの屋上菜園



お台場の商業ビルの屋上菜園を上から眺める

業的側面が強くなってきているが…。この相違は、屋上菜園は都市部の生活者のための「食の安全性」や「オーガニック」を担保するものであっても、公衆が「健康的な生活を送るための生活インフラ」とはなっていないということに尽きる。今まで国が背負ってきた公衆に対して開いている環境という点が、行政から外部化され民間事業になってしまったため、広く公衆が享受できるインフラとして整備されなくなったということだ。

●屋上を利用する事業者の社会的責任

ただ、こうした事実が社会的に間違っていると言っているわけではないので誤解しないでほしい。とくに、本号『景観文化』においてテーマとなっている屋上緑化やそれに伴う屋上菜園事業によって、高密度な都心部でしか見ることができない特異なコミュニティと新しい文化が生まれていることは間違いない。また、屋上のような閉じられた場が商用化することで土地の有効活用として一定の水準を保った運用管理が行われるという意味では有意義な活動のように思う。

しかし、その一方で民間事業者であるが故に起こり得る「採算があわなければ事業から撤退してしまう」ということを心配している。SDGsなどを通して企業と社会が一体となった環境改善が叫ばれている現在、屋上菜園事業も流行に流されることのない公衆が享受できるインフラとして整備されていくことを期待している。

令和元年8月31日に、第8回景観デザイン交流会を開催した。今回は、「水辺空間活用を通じて水都・東京の再生を考える」として、昨今話題の水辺をテーマに、4人の方に情報提供をして頂き、その後パネルディスカッションを行った。

1) 岩本唯史氏 (㈱水辺総研・代表取締役／RaasDESIGN代表)

岩本氏は、官民協働のプロジェクトである「ミズベリング (MIZBERING)」の活動を通じ、全国各地の水辺の空間の活用への支援や情報発信を行っている。2011年の河川敷地占用許可準則改正等の規制緩和によって、水辺の空間も、つくる時代から使う時代へ、さらに使って豊かを感じる時代へと社会が変わってきており、水辺の活用の積極的な民間参入の可能性や社会実験による可能性のサウンディング等、事例を交えて報告頂いた。

2) 萩原康子氏 (「隅田川森羅万象 墨に夢」統括ディレクター／(公財) 墨田区文化振興財団・常務理事)

萩原氏からは、隅田川の内水面河川などの公共空間で行っている現代アートの取り組み、通称“すみゆめ”の活動について、身近な河川空間への親しみや遊び、隠れた資源の発掘や色々な気づき、美しい川を求めるといった活動の目的、まちなかでプロジェクトを行うことで、新しい繋がりや関係性が生まれる等、報告頂いた。

3) 入澤昭芳氏 (東京都建設局河川部低地対策専門課長)

入澤氏から、東京都における水辺活用の現状について、東京都建設局が進めてきた水害に対する安全性の確保に加えて、“人々が集い、にぎわいが生まれる水辺空間の創出”の取り組みについて、隅田川を中心に、水辺の更なる魅力向上と地域の活性化を目的とした、河川敷地の民間事業者によるオープンカフェの誘導、東京版川床「かわてらす」が整備された北十間川等の事例紹介やSNS等で墨田川に関する情報を一般の方に発信してもらい、ハッシュタグ「#隅田川でつながりたい」の取り組み等について報告頂いた。

4) 中野恒明 (芝浦工業大学名誉教授／㈱アブル総合計画事務所・代表取締役／TDA 正会員)

中野氏は、都市デザイナーとして、各地の

水辺再生プロジェクトに関わるとともに、数十年にわたり世界の水辺空間の活用事例を見てきた経験をまとめた著書「水辺の賑わいをとりもどす」が出版された。その報告を含め、世界の水辺開放の状況そして韓国ソウルの清溪川、自ら関わった東京の渋谷川再生の取り組みについて報告頂いた。

5) パネルディスカッション

工学院大学名誉教授でTDA代表理事の倉田氏が司会進行し、岩本氏、萩原氏、中野氏の3人のパネリストで行った。河川空間の利活用についての可能性と利活用の障害になっているものについて、問い合わせの窓口のワンストップ化、先進事例の評価や発信をどうしていくか、官民連携の際の意志決定の効率化の必要性、防災的な視点や自然とのつながりをどう養っていくか等の意見が出された。



TDA NEWS 2-1 日韓都市デザイン交流会2019：開催報告 矢内 匠 TDA 正会員

今回で5回目となる日本と韓国の専門家によるデザイン交流会は、日韓の政治情勢が深刻な状況であるにも関わらず、韓国から20名の専門家や行政職員が来日して「地域資源を活かした地方都市の再生」というテーマのもと、松本市・小布施町・長野市を訪ね、地方都市における再生の実例を見学するとともに、日韓それぞれの事例を参考に、今後の地域の景観整備について、討論を行った。

■10月25日

1日目の松本市のまち歩きでは、松本城、伊藤豊雄氏が設計した毎信メディアパーク、まつもと市民芸術館を見学、人形町通り、縄手通り、蔵のファサードで整備され、民芸品のお店が並ぶ中町通りなどを見学した。あいにくの雨模様の中でのまち歩きではあったが、松本市内の豊富な地下水や水路を活かした街路や歴史的な建物等の既存のストックを活かした空間の整備について説明を交えて見学を行った。

まち歩き後のシンポジウムでは、日本側から都市デザイナーである倉澤聡氏と山田

健一郎氏 (山田建築設計室) から松本市の都市デザインの経験と展望について、韓国側からアン氏から韓国と北朝鮮の軍事境界線にある非武装地帯 (DMZ) にある村の芸術を通しての再生、始興市のシン氏から都市型下水処理場跡地の再生についてそれぞれ報告を頂いた。

その後のパネルディスカッションでは、松本市の市民との協働でのまちづくりの進め方、韓国内の整備のスピードの速さ等でご意見が出された。



■10月26日

2日目の小布施町のまち歩きは、小布施駅から北斎館までを、個人の家や店舗の庭を開放され、自由に入り見学や通行が可能としてまちの回遊性を高めた地域などを通り、栗の小径、中町小径等、既存の土蔵や建築物を生かしたまち並みを説明を交えながら視察した。その後、長野市に戻り、善光寺や参道、門前町、ばていお大門やその周辺のまち並みについて視察した。

まちあるき後のシンポジウムでは、西澤広智氏 (宮本忠長建築設計事務所) から小布施町のまち並み計画、越原照夫氏 (まちづくり長野) から長野市内のまちづくり、倉石智典氏 (MY ROOM) からはリノベーションによる地域活性化について、韓国側からはユ氏から農村地域の住民主導の景観整備の取り組み、チェ氏から水原市の都市再生についての報告を頂いた。

最後に、今回の交流会に多忙の中、準備や当日のご案内など、多大なるご協力を頂いた長野県建築士会ながの支部まちづくり委員会、長野県建築士会松筑支部、松本市、松本都市デザイン学習会の皆さまにこの場を借りて感謝を述べたい。



今年の韓日都市デザイン交流会は誠に自身の濃い充実した交流会であった。韓国と日本が政治的に難しい状況の中で、お互いの景観の事例をみながら次の世代の都市デザインを議論できたことはすでに蓄積された交流会の経験があったからこそ可能なものであった。5年前、1回目の交流会では思ってもみなかった発展であり、その背景には専門家同士の深い人間関係があったと思われる。

都市も本来人間がつくるものであり、その専門家の交流こそ都市発展の最も重要なことである。特に今年の交流会では行政の強い推進力で都市景観と再生を推進する韓国と市民参加の様々な活動が中心になって地域を作っている日本の都市デザインのやり方の違いを見ることができた。その中で今後のテーマとして共同で都市景観を計画する機会の重要性を感じた。次の段階として韓国と日本の専門家達がある地域を対象に両側の良い面を生かし新たな都市デザインをすることができれば非常に嬉しいことだと思われる。



2019年小布施で撮った都市デザイン交流会メンバーの団体写真

今、韓国は都市再生ブームであり、大きなプロジェクトもある。国が主体になって全国で地域活性化と景観整備、まちづくりを含めた事業が進められている。国内で、景観の議論が本格的になってから10年しか経っていないが、このような活発な動きが全国で起こっていることはすごいことだと思われる。一方で、国と自治体が中心になって進めているこのような景観整備の速さは、住民の意思と同じでない場合も多い。都市再生と住民参加を中心に地域づくりをしたいと思っても成果主義によって行政中心の事業になり、持続性のない計画になりやすい状況もある。もちろんこのような状況の中でも他に例のない特色ある都市デザインを行っている地域もある。これは韓国でも日本でも、その地域の特色のある伝統や文化を見ることのできるコミュニ

ティであり、風景でもある。このような都市デザインは韓国での大きな課題であり、ある意味日本での都市景観事業の進め方は大いに参考になる。

今後は、これまでの交流会の経験を生かして2020年からは次の段階となる実験的な地域再生と都市デザインについて議論し始める必要がある。それによって韓国と日本の都市デザインの発展とともに次の世代の都市デザイン専門家に、より大きい仕事のチャンスが拡大できると思われる。

2020年都市デザイン交流会の候補地であるパジュとソウルは今韓国で最も熱い都市デザインの中で、様々な実験が実施されており、その対象として相応しい地域である。来年の都市デザイン交流会がますます期待できる。

TDA NEWS 2-3 日韓都市デザイン交流会in松本 山田 健一郎

山田建築設計室 / 長野県建築士会松筑支部

10月25日(金)の日韓都市デザイン交流会では、韓国から20名余、TDAから15名ほどの皆さんを松本にお迎えし交流する機会を頂き有難うございました。

午前中の街歩きは、昨年新しく開館した伊東豊雄さんの設計による「信濃毎日新聞メディアガーデン」から、湧水をたどりながら城下町を巡り、同じく伊東さん設計の「まつもと市民芸術館」、宮本忠長さん設計の「松本市美術館」、明治期からの蔵造りの建物が立ち並ぶ「中町」、歩行者天国の「なわて通り」と市街地の見どころを見学して頂きました。あいにくの雨にも関わらず、韓国の方々の好奇心旺盛な明るい表情で、楽しい街歩きでした。途中、松本伝統の押絵雛の人形店や、石細工のクラフト工芸作家の工房ギャラリーなどの文化にも触れて頂き、自由時間には、湧水で日本酒を醸す酒屋でほろ酔いになるなど、松本を楽しんで頂けたかと思えます。

TDAと松本市在住の我々との関わりは、10年程前、私が東京時代にお世話になった曾根幸一さんからの「今度、TDAという景観デザインのNPOの皆で松本に行くから宜しく」の一言でした。TDAやJUDIのメンバー30名ほどを松本市にご案内して、セミナーをご一緒させて頂きましたが、土田旭さんのペランメイ調の中町通りに対する少し辛口な考察が今でも思い出されます。また、宮沢功さんには松本景観賞の審査員を長くお努め頂いたり、JR松本駅前広場のデザインには、高見公雄さんにデザインア

ドバイザーになって頂いたりと色々松本市の都市デザインに関わって頂いております。中でも、昨年の長野県建築士会の「景観アドバイザー養成講座」では、倉田直道さんにコーディネーターになって頂き、何人ものTDAのメンバーの方々に講師になって頂き、TDAの皆様松本市にお越し頂き交流する機会もしばしばです。そんな縁があって、日韓都市デザイン交流会で、韓国の都市デザインでご活躍の方々と松本市で交流する機会を頂いたのは有難く、とても刺激的な機会となりました。

夕方からのセミナーでは、最初に松本都市デザイン交流会の倉澤聡さんの、松本市の地理歴史的概要と都市デザインの概説から始まり、私の松本市のタウンアーキテクトとしての活動の発表、韓国からはAHN BYOUNG JIN先生のアートを活用した民参加を通じた芸術文化村づくり、SHIN JAE RYUNGさんの産業遺産再生と市民参加の地域づくりプロジェクトの発表がありました。我々の市民活動を軸にした小さな積み重ねからの都市デザインの実践に対して、韓国の方々から多くの共感や反応を頂いた事は私の想像を超えて意外なほどでした。また、韓国の方々の発表や質疑での、街の資産をアートへ昇華させてアピールしたり、商業的な利用価値に転嫁させたり、などのアドバイスは、とかく内に籠りがちな日本の地方都市に対して前向きな示唆を与えて頂きました。

翌日の長野のセミナーでの発表でも、日韓を問わず都市デザイン、特に地方都市における都市デザイン活動が、「まちづくり」から「まちづかい」へと変貌していく様子が紹介され、世界の都市デザインが転換期にある事を再認識できたことは大きな収穫でした。しかし、未だ「地方の時代」とは名ばかりの日本の実情と照らして、地方都市デザインに投じられる国家予算が日本のそれを一桁上回る韓国の実情を伺うにつけ、うらやましい限りです。

街歩き、セミナー発表・質疑応答、懇親会を通して、韓国の方々は終始明るく前向きで(特に二次会は学生時代を思い起こさせる様な圧倒されるパワーで、翌日を心配しましたが、皆さんの体力は私の心配には及びませんでした)楽しい二日間でした。そんな明るさに触れ、今一度、自らが楽しみながら「まちづくり」「まちづかい」に関わる姿勢を見直す機会となった日韓都市デザイン交流会でした。

「岐阜市」その2

戦略的に風景からまちをアップデートする



岐阜市の中心市街地といえば「柳ヶ瀬商店街」である。歴史的には新しいまちで、戦後復興で、デパートや映画館、呉服屋、洋品店など買い物と娯楽を楽しむ商店街という性格をもつ。私も小学生のころは、親に連れられて柳ヶ瀬に遊びに行くことが特別なことだった思い出がある。

私たちが柳ヶ瀬に関わり始めたのは、2010年くらいからになるが、シャッターが目立ち、新規参入者もほとんどない状況だった。客層も高齢者を中心とした古き良き時代を体験した人がメインとなっている。そんな中、個人の顔が見える個性が集まった商店街に魅力を感じて、ミツバチ食堂を営んでいた岡田さんと出会い、意気投合。新しい創業がまちで起こることを目指し、チームを作って若い人たちを呼び込む取り組みを始める。

初期段階では、周辺の魅力的な店主に声をかけて年に一回のイベントを企画した。イベント当日は多くの若い人たちが集まり、日常の柳ヶ瀬にない風景が出来上がった。達成感はあったが、繰り返すうちに負担を感じるメンバーも現れ、継続の難しさと一年のイベントではまちは変わらないことに気づく。「お客のいないところにお店は出来ない」という根本的な部分に立ち返り、まちへのファンづくりと持続可能な運

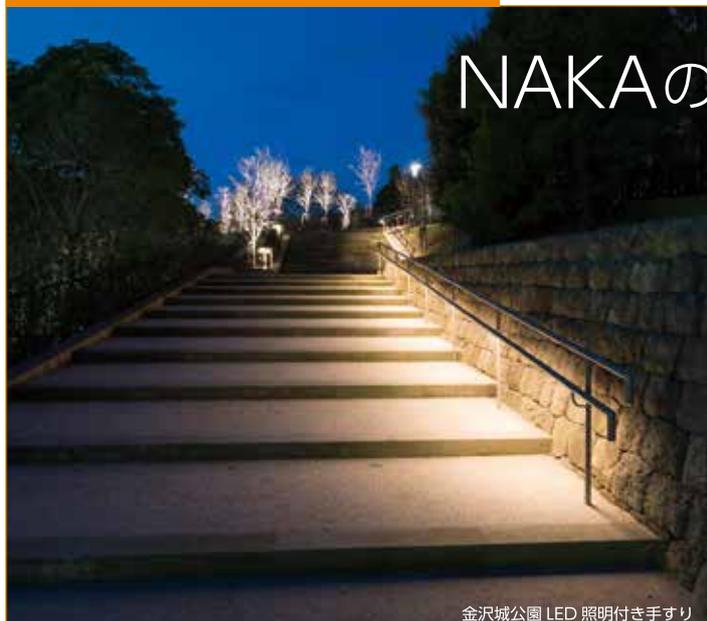
営体制づくりにシフトしていった。そして、2014年に月一の定期市「サンデービルディングマーケット」をスタート。ターゲットを設定し、商店街らしさを現代版に解釈した企画を立ち上げ、地道な広報・宣伝行い、アーケードを活かした会場をデザインしていった。商店街組合とも信頼関係を築き、出店数50で始めたマーケットは6年目を迎えたが、出店数150の東海屈指の集客力の高い手づくりマーケットに育った。

この5年間で様々なチャレンジを行ってきたが、新しい起業や出店が生まれ、今では路面に面する店舗にはほとんど空きのない状況となっている。安定したマーケット運営により、資金を得た私たちは岡田さんを代表に柳ヶ瀬を楽しいまちにする株式会社を設立。商店街の面々からも応援をいただいている。活動を会社化することで、遊休不動産活用事業（ロイヤル40：写真上）や老舗喫茶店（サロンドマルイチ：写真下）の事業承継などにも取り組んでいる。

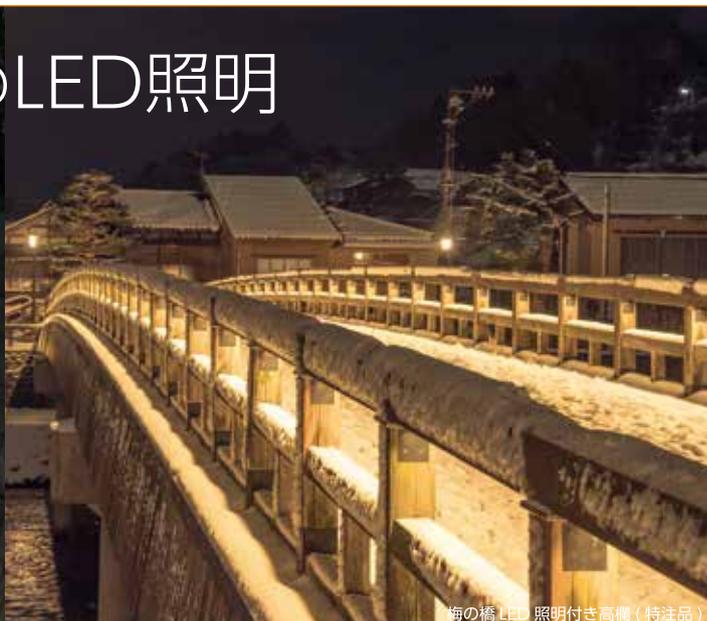
「市（いち）」が立ち、人が集まり、商いがおこる。わたしたちは、ずいぶん前から都市で起こってきた風景を、今の価値観とまちへの思いで再構築している。人がいるからこそ、まちは成立する。これからも自分たちの大切な場所を楽しく、戦略的にアップデートしていきたい。

景観ビジネス最前線

NAKAのLED照明



金沢城公園 LED 照明付き手すり



梅の橋 LED 照明付き高欄（特注品）

ナカ工業株式会社

www.naka-kogyo.co.jp

ホワイトボード

今回は屋上の緑化等をテーマに様々なご意見を語ってもらった。その一部を執筆している身としては、その感想は避けたいが、屋上一つとっても、多様な都市景観形成の重要な要素になると改めて知ることができたし、同時にその可能性を積極的に議論してい

く必要性も感じた。一方、TDA主催のサロンや交流会も盛んに行われている事をお伝えできた事は会員の1人としてうれしい。しかし編集作業等の不手際で今号が大幅に遅れてしまった事を编者として多に反省し読者にお詫びしたい。



NPO法人 景観デザイン支援機構 事務局

私達は下記の企業・団体のご協力をいただいています。

(株)昌平不動産総合研究所 / (株)住軽日軽エンジニアリング / 都市環境デザイン会議 / (株)都市環境研究所

〒111-0043 東京都台東区駒形 1-5-6 金井ビル 3F
Tel : 080-6722-4114 Fax : 03-3847-3375 E-mail : main@tda-jr.jp
http://www.tda-jr.jp https://www.facebook.com/tda.public

【編集：(株)アーバンプランニングネットワーク】2019121000